

1960年代の終わりに、韓国は産業成長の時代を迎えた。金芝河が詩人として活動を始めたのは、ちょうどその時期である。当時の腐敗政権は、近代化を主要政策の一つとしたのだが、結果的に、生命に価値を見出す伝統的な思想や再生の文化を「国の産業的発展」の名の下に破壊してしまった。金は、生命中心の共同体としての自然を破壊しようとする死の力に激しく抗い、生命に価値を見出す思想を保持しようとした。その点を、金は抵抗と闘争の詩人として強調した。「五賊」「赤い道」「灼けつく渴きの季節」などの詩作品には、彼の生命中心の思想が表れている。しかし、彼の直接的な戦いや抵抗は、次第に大らかな受容や和解の段階へと進展していった。1980年、すなわち「エーリン(Aerin)」以降に発表された「星の野原を見上げて」「中心の苦しみ」「花開く」「夜明けの川」(2006)「絹の道」(2000)などは、この和解の段階の作品に属している。金の詩の世界には、死の力に対する直接的な抵抗と闘争の段階における特質や、死の力すら純化してしまうような根源的かつ包括的な視点と合致する再生の文化の再構築が見られる。特に、近年出版された「ウワガエ(Hwagae) ; 花開く」「夜明けの川」「絹の道」においては、詳細な状況描写の中で、黙示録的な予言が現実化される様子や生命と平和に対する意識の集中が示されている。

ここで一つ、問題提起を行いたい。それは、金が自身の生命を危険にさらしてまで激しく抵抗と戦いを繰り返したのはなぜか、そして矛盾しているようではあるが、その生命危機の状況の中で復活の契機を見出したのはなぜか、ということである。その様子が記されている文章を以下に挙げてみる。

その頃、コンクリートと鉄格子の窓の間にある穴に埃がたまっている箇所があり、そこへ風で飛んできた草の種が雨粒に水分をもらって発芽し、葉を出していた。それを見て獄舎に戻った私は、激しく泣いた。命という言葉が、新鮮に、強く、私に迫ってきた。一つの命は広大な空間を占めることができるのだ。命は脈々とした一筋の流れであり、それには始まりも終わりもない。むそん、柵も壁もない。死も破壊もない。私は自分自身が徐々に小さくなっていくような感じがしたし、狭窄嘔門と統合失調症を患っていた。どうすれば私の心身に、命の原理を授けることができたのだろうか？

「灼けつく渴きから命の海へ」

金は皮肉にも、獄中、鉄格子の嵌められた窓の向こうに、限りなく大きな広がりを持った自分自身を発見した。言い換えれば、草の種は詩人自身の姿であり、彼の本質を明らかに映し出している。狭い監獄にも関わらず、彼の想像力は柵も壁もない生命の海へと広がっている。監獄というのは、一義的には弾圧を受けた詩人が収容されている場所だが、そこは畢竟、死の力に対する抗いの場、すなわち終わりのない闘争構造の象徴とも解釈できる。ここで詩人は、その闘争構造を越えて「心身に大きな原理を経験するために」今までの路線を離れてゆく。

実際、金は凄まじいまでの精神的苦難を経た後、詩を書きながら命の修復を目指すのだが、そのことでいくつかの真理に開眼する。それは彼の作品の一つ、「中心の苦しみ」に読みとることができる。小論では、金の詩の世界に表現されている生命中心の思想を考察し、それがどのようなものであるか明らかにしたい。

2

近年、人類はみな環境の危機にさらされている。物理的には、人間達は地球全体やあらゆる環境を破壊してしまうかもしれないし、精神的には、我々はみなアイデンティティ喪失の危機に直面している。こうした危機は、そもそも人間中心のイデオロギーに起因している。それは近代の機械論的パラダイムに社会が傾いていった16世紀から17世紀以降に発展してきたものだ。近代を支配した理論は自己中心の思想で、急速に生き物を無生物へと変容させてきた。近代科学の規範となった機械論的イデオロギーは、デカルトやニュートンによって提唱されたものだが、それが人間と自然、そして人間同士の間の調和のとれた関係を争いに変えてしまったことは周知のことである。この均衡を欠いた構造と秩序は、主として合理的かつ分析的な思考、すなわち、それぞれに生命を持った存在であるお互いを、単に世界を構成する個々の部分と見なす思考に起因している。

この頃では、環境問題がより深刻に、かつ広範囲において語られ、いわゆる「環境詩」が文学界の表舞台に鮮やかに登場しはじめている。現在の環境詩のほとんどは、環境破壊の現象に対する風刺や批判にとどまっている。つまり、今の環境詩は未だ、環境破壊の基本的な原因がどこにあるのかを示す段階にあり、適切で理性的な代案を提示することも、この重大な課題の解決策を提案することもないのだ。むしろ、そうした衝撃的な環境問題を書き表すことに意義はある。

日常的な問題として読者に考えさせるきっかけになるからだ。しかし、そのような書き方をしている、環境問題の解決はできない。

金は、明快な警告を発し、問題の解決策を提示する詩人だと言えよう。彼は、他の文学も行っているような環境の危機について書き記す以上の活動をしている。彼は、生命的存在の再認識と発見が大切だと説く。彼における生命の価値の認識は、彼自身の本質を発見したことに基づいている。つまり、彼は彼自身、生命の本質的な存在なのである。

私は数えた / 私の年を / 地球の年は三十五億年だ / 宇宙が爆発してから、百五十億 年が過ぎた / それより前もそれから後も、永遠が続く // ああ、莫大な年月 // 私は永遠 に死ぬ / 命には死はない / 怖れはない / 今日 // 私は一本の草を愛する、 / そして私を愛する。
「新しい春 8」

私は何者か？私は宇宙である。ゆえに、私の年齢は宇宙の年齢と同じだ。私の身体は永遠の歴史が蓄積された存在である。私は多くの助けを借りて命を繋いでいる。たとえば私が口にする水、空気、食物など。そしてそれらも何か別のものによって生み出されているのだ。だから金は詩に書く、「君は忘れたのか / 一枚の木の葉が私を養い / 水滴が私を生み / 鳥が私を育てることを」(「私、かつて」)あらゆる個人の生命は条件付きであり、宇宙における他の生命に依存せねばならない。言い換えれば、自分の命を補ってくれるものがあってこそ、この宇宙で自己実現ができるのだ。生命の主体は個々の生命体に限定されないし、他者から切り離されもしない。宇宙の中で、生命を補ってくれるものとともにあって、はじめて生命の一部として存在できるのだと、理解すべきである。

先に引用した詩では、語り手は直線的な時間の流れとは違う視点から自分の年齢を数えている。それは、語り手が自己を宇宙の中の存在として意識しているからだ。彼はそれを「両耳で / 宇宙的な時間を / 血の中に」感じる、と言う。(「私、かつて」)金には特別な宇宙的光景が見えているのだ。彼は言う、「私の精神は開かれ / そして全宇宙と万物を抱きしめる」(「山の時間・第四集」)そして「私の骨には / 草が育ち / 太陽と月が昇る」(「山の時間・第五集」)私は生まれ変わった精神的な存在であり、ゆえに私の内部には神聖な「神」が宿っている。

こんな日はない / 生きている / 生きているのは / 今、そしてここ / ここから向こうへ / 今から昔へ、遙かな未来へ / 上空に、地下深くに、方角を越えた四方に // 生命は 満ちている / 今、ここに、命は溢れている / 終わりのない一日 / だから / 懂れよ、 / 私の方へ / 私の心へ来てほしい // 神よ / あなたはこのように生きている // 毎日 / 死 は存在しない / あるのは生命だけだ
「その日」

この詩には、金の生命に対する考えが現れているが、それは彼が人間と世界を理解する上での評価基準と言えよう。彼が尊敬の対象としている「神(創造主)」とは、現実世界を超越したところにいるのではなく、彼の内部に生命あるものとして、「今、ここにあって / だから懂れが / 私に向けられるべき」ものなのである。詩人は「私」すなわち「神」は終わりのない、霊的かつ宇宙的存在だと力説しているが、その考え方は Jewoo Choi の「主を待つ (Waiting for Master)」思想を連想させる。その思想の解釈、「有神靈 外有氣化 一世之人 各之不二」とは、霊的な存在は人間の内部にあるもので、この世に姿を現す時には別の形をとり、ゆえに、その二つは切り離すことができない、という点に注目している。この詩句における霊的存在とは内的本質のことである。「氣化」とは外界での他の存在との結びつきを意味し、「不二」とは活動と実現化を意味している。直訳すれば、人間の内部には霊 (spirit) が宿り、それは外界に向けて満ちあふれ、現実の生活において活動をするものだ、ということになる。この思想においては、あらゆる人々は内部に普遍的な霊的存在を有するので、詩人自身を含めた人類すべてを、象徴的に網羅していると言える。それによれば、この世の条理には活動、循環、霊的存在の実現があり、あらゆる生き物はそうした連続的な生命の秩序に加わり、自己の実現をはかるべきだということになる。

次の詩では、外的存在と自己の本質とがどのようにして関わりを発展させてゆくのかを見出す過程が描かれている。

孤独というものは存在しない / そうだ / 土、水、空気、それに風 / それらは皆兄弟 だ / いや、それらは / 兄弟よりもずっと優れた大人たちだ / 私には解ってきた / 自分が非常に幸福であることが // 祝福のように / 鳥が私の頭上で囀っている

「新しい春・3」

語り手はあらゆる存在は「大人たち(神)」だと言う。周囲の事象も、彼自身がそうであるように、生命を持った宇宙的な存在である。語り手は無生物にも、その存在においては生命と霊が宿ると理解している。「土、水、空気、それに風 / そ

れらは皆兄弟だ」という箇所には、無生物と詩人自身が一体であるという彼の基本的考えが現れている。自分自身と他の存在全てが一つの集合体であり、同じ資質を有している。自分の体の中には、霊魂だけでなく外的な存在も宿っているのだ。その両方とも、この世界の中で非直線的な活動をする共通の主体だ。主体と客体とは一つであり、切り離すことはできない。だから、金は「一枚の木の葉が / 見つめている / 私自身を」(「私、かつて」と書き、「乾いた木の枝に / お辞儀を一度しておくれ」(「何」と書く。生命の原理に気づいた彼は、「孤独というものは存在しない」と言う。彼には、頭上で囀る鳥もまた祝福なのだ。

表面的には、金の詩作品に表れている共同の命の思想は、古代アニミズムに似ているようにも見えよう。しかし、古代アニミズムとは動植物や無生物には善と悪の霊が宿るとし、またそれをタブーと見なす思想であり、金の考えていることは全く異なる。金の霊魂主義は存在における「共通の主体」または「発展した主体」に注目するものであり、神秘的なタブーに拠る肉体と思想が主体の古代アニミズムとは、その点で差違が明らかである。

個々の生命は受動的な様式をもつと考えられる。金は個人の命の価値と原理を以下のように書いている。

空っぽの部屋で / 私はひとりだ // ひとりで私は生きている // 生きている / 宇宙として生きている // 空っぽの部屋に / 宇宙がある // すべてが / ひとりぼっちで生きながら、一緒に跳ねまわっている // ある明るい一日 / 秋の日に / 私は空っぽの部屋で生きている 「私は生きている」より

語り手は「ひとりで / 空っぽの部屋にいる」。あらゆる生き物は、それぞれに生きている別々の存在だ。しかし「ひとりで生きている」とは孤独に生きているということではない。それぞれは個々の存在でも、他者と共に生きている。金は「すべてが / ひとりぼっちで生きながら、一緒に跳ねまわっている」と書いているが、この一文は、二つの逆説的な構造を一つの実体に統合している。同様に、「空っぽの部屋に / 宇宙がある」というのも逆説的ではあるが、「空っぽの部屋」と「宇宙がある」ということが結びつけられて一つになると、そこに詩的均衡が生まれる。この視点に基づき、彼の詩における生命存在を支配する原理はすべて対称のうちに見出される。畢竟、命の存在は逆説的な表現で語られるものなのだろう。

個々の命は単独ではあるが、外界と結ばれている。そしてまた、その命は外部に対して開いたり閉じたりしている。言い換えれば、命の存在は個人的な面と普遍的な面と、両方を併せ持つ。

土から / 押し上げる力が、強烈に / 中心の力が // 起重機のように花を / 広げて / 空に散らす //// 明日は / 田舎へ行こう / 田舎へ行って / 空っぽにして花を咲かせることにしよう

「中心の苦しみ」より

金の詩では、生命体には中心がない。中心をなくすことで、花はみな中心として咲くことができる。中心としての力は「土から」生まれ、その力は花を空へ広げて咲かせる。この詩の「空っぽにして花を咲かせることにしよう」という一行に、詩人の考える生命の原理が象徴的に表現されている。このような原理は、宇宙の中のどのような存在に対しても当てはまる。

普遍的な生命の原理は、平等な共生的関係の中で広がり、命を進化させてゆく。それだから、もしも生命的存在が中心と周縁との二つの部分に分断されてしまったら、命の繋がりが壊されてしまうのだ。

3

金は宇宙的な命を生きている。彼は自己を見出すことで、宇宙的な命の原理を発見した。あらゆる生き物は、自らの生命を補ってくれる普遍的な存在と、宇宙的な命の主体としての霊と、そして個人としての個性的な生命との関係の中で生きている。宇宙は、あらゆる雑多な生物にとって調和のとれた、生命の場である。しかしながら、こうした生き物の秩序は、現代の産業社会では急速に壊されているのだ。

食べて、また食べて
殺して、さらに殺す
今、ここにいる
私が
壊している
この地球を、徹底的に

「涙」より

宇宙を破壊している張本人の主体は「今、ここにいる / 私」である。人類は生態系を脅かす危機のただ中にある。近代化とはまるで癌細胞のようであった。支配的な制度として近代化は、命あるものの生命力を奪い、結果的に生態系を破壊している。

「全世界の近代化」に端を発した文明の危機から逃れるために、新たな世界への出口が模索されている。生命のパラダイムが進展し、20世紀の冷酷な産業化の彼方に途切れない命を探求してゆかなければならない。このためには、生命の本質の適切な再認識と発見が求められている。金が詩の中で明らかにしている靈魂、多様性、個性につながる生命重視の思想は、機械論的パラダイムによって生み出された問題の解決になりうる。人類の文明社会の歴史において、今、彼の詩が持つ意味は大きい。